

パネルディスカッション「ヒューマニズムと古典学」

パネリスト：鎌田 繁

イスラームの文化のなかで古典と呼ばれているような書物はなんだろうか。イスラームは狭く西アジア地域にだけに限ったとしても、言語的にはアラビア語の他に、ペルシア語、トルコ語という異なる言語圏に広まっている。それぞれの言語圏にはその範囲で認められる古典的文学作品が存在し、人々にさまざまな影響を与えたことは確かである。しかしながら、今道先生は「人間の精神の危機を克服」するという意味をクラシクスの語はうちに含んでいると言われたが、数多くの倫理、哲学、文学の作品が生み出されているイスラーム世界のなかで、このような意味をもつ書物、「古典」は、クルアーン（コーラン）以外には考えられないであろう。クルアーンは人間がムスリムとして生きていく上で第一に参照されるものである。

ムスリムにとってクルアーンは文字通り「神の言葉」と考えられており、人間精神の所産であるとはされない。その意味で絶対的権威として人間の思索や行動を導く。このような意味をもつことができる文献は、近代以前のヨーロッパ世界ではおそらくキリスト教の聖書であろう。今道先生のお話には「ヒューマニズムとしての」という限定がつけられているためか、聖書についての言及がなかったが、「精神の危機を克服」するために人がよりどころとする文献としては、おそらく古典ギリシアやローマの作品よりは聖書であったのではないか、と思われる。ヨーロッパ世界でギリシア古典と並んで重要な意味をもっていたと思われる聖書が、どのような意味、役割を果たしてきたか、その位置づけをお話いただければありがたい。

「神の言葉」としてのクルアーンは、そのテキスト自体を変改して理解することは想定されない。そして「クルアーンは充足しており、それを得れば他の何も必要ない。またそれの他には充足しているものはない」という預言者ムハンマドの言葉が伝えられているように、クルアーンにはすべてのことについての答えが備わっている

と考えられている。有限のテキストから解釈者の置かれた状況のなかで適切な意味を引き出すのがクルアーン解釈である。解釈者のもつ関心や置かれた時代や状況はさまざまであり、引き出されたクルアーンの意味はそれに応じて多様である。クルアーンには当然書かれたテキストとして文脈があり、それに基づく解釈は尊重される。しかし、そういう表面上の文脈を離れて一語、一句に集中し、そこから何らかの意味を引き出すことも行われる。表面上の文脈も人間にとってそのように考えられるということであって、神にとっての真の文脈は誰にも分からないので、人間は自分の力の限りを尽くしてそれに迫る努力をするだけである。

クルアーンの解釈は長い歴史のなかで徐々に多くの人に受け容れられるものが定着してきたのであり、教会のような権威によって定まったものではない。ヨーロッパで人文主義者たちが敵愾心を燃やしたような教会の権威はイスラーム世界には基本的に存在しなかったので、人文主義者による聖書の読み方の転換が起きたと月村先生が指摘されたような劃期性は、イスラーム世界ではみられないように思う。むしろ、クルアーンのテキストの確定した時から現代にいたるまで、クルアーンの解釈はそれぞれの時代で多様な姿を現しており、それ全体でイスラームの思想を豊かにしていると考えられるのである。

パネリスト：小池 澄夫

最近あまり聞かなくなったが、東西文化の総合こそがわが国の文化的使命・目標であるといった主張がよく行われていたのを記憶している。しかし、昨日の藤澤先生の基調講演でも、西洋の伝統もその源に遡ってみれば、東洋の思想とも通底するところがあるというお話がありました。実際、自然観などを調べていくと、東と西よりも、古代（あるいは中世も含め）と近代の違いが大きいことに気づかされる。東西の対比は、古くはギリシア

人のオリエント世界に対する独自性の表明、自己確認の文脈で援用されたものでもあるが、一般には近代において成立し世界制覇した強力な科学技術文明と各地の伝統社会との葛藤に発するものといえるだろう。その意味で人文的古典学の再構築は、すぐに成果があらわれる性格のものではなく、また単発のプロジェクトで終るものでもなく、大きな文明的な課題を負っていると思う。

もう少し細かい点に入ると、このような経緯から脱西洋中心主義といった方向が打ち出されるのも理解はできるつもりだが、しかし西欧文明はその成立において古代ギリシアの直接の、あるいはイスラム文明の仲介を経た、継続的なルネサンスという一面ももち、また古典の伝統を絶やさぬ努力も嘗々と続けられている。というわけで、古典学の再構築という大きなテーマに関連して言うと、脱西洋中心主義といったことよりも、今日の今道先生のお話にもありましたが、専門分化し精密化すること（このこと自体はもちろん必要ではあるが）に伴う弊害の方が私としては気になる。古典学を専門とする研究者はもとも少数派であろうが、それでも昔よりは少しは数もふえているはずである。しかし、社会一般の古典に対する関心は目立って低下し、同時に歴史、時間感覚の欠落と言語能力の衰退を招いていると思われる。こういう物言いは大げさに受け取られるかもしれないが、私が勤務先の学部改革・改組に関係した際に、出所はナントカ審議会（ということは識者の集まりなのであろう）の答申である、おそろしく空疎で平板な言葉の羅列に一種病的な不気味な印象を覚えたので、一言しておきたかった。解説や翻訳を明快平易な日本語で作成することは、たいへん重要である。

パネリスト：月村 辰雄

古典研究をヒューマニズム（人文主義）と結びつけて考える際の問題点は、歴史的にいて二つあるように思

われる。いうまでもなくヨーロッパのルネサンス期のヒューマニズムは、聖書およびその周辺の宗教的著作群ではなく、フマニオーレス・リテラエ（より人間的な著作）であるギリシア・ローマの世俗作品を対象として展開した精神運動である。その結果、特に生と人生の肯定的意義を伝える作品が一般中等教育の課程の教科書（クラシック）に選ばれ、諸文明圏に普遍的に存在する各種の教典学とは意味を異にする古典（クラシック）学が形成された次第は、すでにニューズ・レター第1号に触れた通りであるのでここでは繰り返さない。このヨーロッパ型の古典学が、当然のことながらある程度まで合理主義や自由思想と親和力を有し、だが結局のところ各種の効率性に集約される資本主義とは折り合いを欠いて危機を迎え、現在なんらかの新しい地平を模索しているというシナリオが、はたして他の文明圏における教典学の色合いの強い古典学にもあてはまるのかどうか。むしろ教典学型の古典学は、相互理解を拒み、自己の絶対性を確立することによってイデオロギーの変化を生き延びてきたのではないか。また、そのように閉ざされた古典学であるからこそ、かえってイデオロギーにはじき出された人間を受け入れ、変化とは無縁な永遠性という慰めを与えることができたのではないか。

ヨーロッパの古典学は、その発生当初においてきわめて闘争力に富んだ党派色の強い人間たちによって押し進められた。フィレルフォのあくの強さ、ロレンツォ・ヴァッラの闘争心、エラスムスの自己宣伝の巧みさ。要するに古典学は、その仮想敵であるスコラ学的なキリスト教学に対する、時とするとずいぶんあざとく、かまびすしい、一種のイデオロギー闘争であった。逆説的にいえば、現在の時点で古典学に携わる研究者の多くは、静謐を好むその心性からいって、もし15世紀のイタリアに生まれていたなら新来の古典学から目をそむけていたかも知れない。

また第2の問題点は、このヨーロッパ型古典学の内部抗争に求められる。古典学はその当初より、新しくもたらされたギリシア・ローマの世俗作品を前にして、その正確な読解作業に向かう少数のグループと、それと同じ

ほど典雅で力強い作品の制作に向かう大衆的なグループと二分されていたといっても過言でない。しかも17,18世紀の中等教育の課程を席卷したのは後者のグループであって、古典学(フランス語でいうところのユマニテ)の最終目標は、ある場合にはキケロ、ある場合にはセネカはだしの文体を操る古典語の作文練習であった。唯一写本に断片で伝わる逸名著作家の作品の、しかも他に用例を見ないハックスの語義の確定というような作業が、いくら古典学の最盛期だからといって、はたして一般の教養人の興味まで惹くことができたどうか。おおかたの嗜好が、当世風的话题をキケロ風の雄弁に仕立て上げる作業に向かったのは当然であった。

この意味で、19世紀以降の精緻な近代古典学とは、古典語の知識が時代の変化とともに必要性の度合いを減じ、一般の教養人が古典語の習得からじょじょに遠ざかるという代償の上に拠って立つところの、正確な読解作業を志す第1のグループの復権の運動とすることができるように思われる。それは昔から少数の「探求心のエリート」たちの作業だったのであり、そのままの形では現代の一般社会の興味を惹くことができないのは当然であろう。ルネサンスから近世までをその最盛期とするヨーロッパ型の古典学をモデルとして考えるなら、かつて中等教育の学生たちが構成していたところの裾野の部分の拡充を考えるべきではないだろうか。

パネリスト：徳永 宗雄

古典学にはヒューマニズムが不可欠であるという今道先生のご指摘は重要である。ヒューマニズムのない古典文献学は文献考古学に過ぎず、現代との接点を失ってしまうだろう。しかし、古典インドの考え方からすると、「ヒューマニズム(人本主義)」という言葉に若干の抵抗を感じる。「ヒューマン(人間的)」という概念が古典インド文化に希薄だからである。古典インドには、一方

に、バラモン(祭官階層)、クシャトリア(王族)、ヴァイシャ(生産階層)、シュードラ(奉仕階層)等の、カースト制度に基づく集団の定義がある。そして、その対極として、「一切衆生」「生きとし生けるもの」という、極めて広い範囲をカバーする観念がある。後者には人間のみならず、神々から植物まで、生命を持つと見られるものが全て含まれる。これら二つの集団定義と比べると、その間に位置する「人間」という概念の影が薄い。「ヒューマニズム」をインド的に言い換れば、「一切衆生主義」ということになるだろう。現在深刻な問題となっている環境破壊や生命倫理の問題の根本には、生類の中で人間が特別な地位を占めており、その欲望を満たすためにはいかなる科学技術も是とする考え方が存在している。「ヒューマニズム」の背面を見つめその意味を問い直すことも、古典を現代に生かすひとつの道と考えられるのではないか。